

東国 道の果て(常陸国) もっと奥の方(上総国)
あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に

生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、
田舎びていたであろう

いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語と

いふもののおんなるを、いかで見ばや
どうにかして見たい

と思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母
することもなく退屈な

などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏

のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、

いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらに
心引かれる気持ち

いかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまま
ひびくおぼえ

薬師如来像

に、等身に薬師仏をつくりて、手洗ひなど

して、人まにみそかに入りつつ、「京に疾く
こころりと(仏間に)

上げ給ひて、物語の多く候ふなる、

ある限り見せ給へ。」と、身を捨てて

古文ノートを作る

① 本文を書写する。
(三行間隔を取る)

② 重要語句に傍線(赤)を引き、右側に(意味)を書く。

③ 助動詞を で囲み、左側に(働き・活用形)、右側に(訳)を書く。

④ 敬語に波線を引き、左側に(働き)、右側に(訳)を書く。

このプリントはノート作りの例です。

以降のノートは後日クラッシーに掲載します。

5月31日までの課題

「門出」

「物語」

「なげきつつひとり寝る夜」

「あまぐもにそる鷹」

の四編をノートに書写し、重要事項(語句の意味、助動詞の働き・活用、敬語の働き)を赤、青で書き込み整理する。

額をつき、祈り申すほどに、十三になる

年、上らむとて、九月三日門出して、(地名) いたちと

いふ所に移る。

年ごろ遊びなれつる所を、あらはにこほち散らして、取り散らかして

大騒ぎして たち騒ぎて、日の入り際の、いとすぐく霧りわたりたる

に、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まに

は参りつつ、額をつきし薬師仏の

立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、

人知れずうち泣かれぬ。